

こもちまがたま
子持勾玉 (福満遺跡出土)

彦根市西今町の福満遺跡から、発掘調査によって出土した子持ち勾玉です。古墳時代後期（6世紀前半）の土坑（地面に掘った穴）の中から、当時の土器などとともに出土しました。

子持ち勾玉は、大型の勾玉形を母体として、その腹背および両側辺などに小型の勾玉形を作り出したものです。使用の正確な用途は明らかになっていません。福満遺跡出土の子持ち勾玉には、腹部に1箇、背部に3箇、両側に2箇ずつの合計8箇の小型勾玉形が削り出されています。全長8.1cm、幅4.6cm、厚さ2.9cm、重量116gを測ります。石の材質は深緑色の滑石製。表面を詳細に観察すると、幅0.2～0.5cm程度の細かい削り痕を確認することができます。しかも、削り痕はその痕跡をほとんど残さない入念な研磨によって仕上げられています。そして、平滑となった表面に、新たに円圏文が施されています。円圏文はドーナツ状の幅のある圏線とし、中央には貫通しない孔を穿っています。円圏文の径は0.7cm～1.1cmです。

滋賀県内では福満遺跡を含めて14点の子持ち勾玉が出土していますが、その多くが採集品や包含層から出土したものであり、福満遺跡のように明確な遺構から出土したものは3点しかありません。また、表面に円圏文が施されている現存例は福満遺跡が唯一のようです。

県外に視野を広げると、子持ち勾玉の類例が6世紀を中心に、山陰・北陸・東北などで出土しています。さらに、日本からもたらされたと考えられる子持ち勾玉が朝鮮半島でも出土するなど、日本海沿岸から朝鮮半島に至る地域間の交流を示す特異な形状の資料として注目されます。

彦根市では、出土状況や埋納時期が明らかであり、円圏文を有した入念な作りの子持ち勾玉として全国的に数少ない優品であることから、平成21年度に彦根市指定文化財としました。

